

相原廃寺 II 大下遺跡

平成元年度中津地区遺跡群発掘調査概報（II）
中津市文化財調査報告 第8集

1990

中津市教育委員会

序　　。　文

大分県の北端に位置する中津市は、県北の中核都市として発展してまいりました。特に近世においては、中津10万石の城下町として発展し、その後も商業を中心とした商都として、また近年はハイテク関連企業の誘致も含めた次世代の都市づくりを目指しております。

そうした中、中津市には先人達の遺した文化遺産も数多く残されており、先年国の重要文化財の指定をいただいた薦神社神門をはじめとして、国、県、市の指定文化財は68件を数えています。

この様な文化財の保護につきましては、平素よりその重要性にかんがみ、万全を期しておりますが、近年の開発事業の増加に伴い、埋蔵文化財については、その対応に苦慮する場合も生じております。

こうした状況に対処すべく、中津市教育委員会では、昭和63年度より国庫及び県費の補助をいただき、市内に所在する重要遺跡の確認調査を向う5ヶ年の継続事業として実施することといたしました。

2年次にあたる本年は、昨年に引き続き相原廃寺の範囲確認調査と、新たに大下遺跡の範囲確認調査を実施いたしました。相原廃寺については、当初の予想に反して良好な状態での遺構の確認がなされ、また、市立今津中学校移転予定地である大下遺跡では、六世紀末の良好な集落址を確認することができ、今後、更に詳しい調査を実施したいと考えております。

史上空前の好景気を背景に、官民を問わず開発事業が目白押しの現在、先人達の遺した貴重な国民共有の財産であります文化財の保護は、現代に生きる我々に課された大きな責任であります。未来の子供達へ、この素晴らしい文化遺産を伝えるためにも、今後ともより充実した文化財保護行政を進めてまいります。

おわりに、調査にあたり御協力をいただいた地元の方々、および、御指導をいただいた調査指導委員の諸先生方、並びに県文化課をはじめ関係各位に対し、衷心より感謝の意を表する次第です。

平成2年3月31日

中津市教育委員会

教育長　武　信　　元

例　　言

- 一、本書は、中津市教育委員会が平成元年度に実施した中津地区遺跡郡発掘調査事業の調査概要である。
- 一、調査は平成元年度国宝重要文化財等保存整備事業費、及び平成元年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。
- 一、調査にあたって相原廃寺では相原地区区長前川十四一氏をはじめ、地権者である恒住キサヨ氏、および宮垣俊範氏の御協力を得た。また大下遺跡では植野地区の方々に御協力をいただいた。記して謝意を表したい。
- 一、調査期間中、調査指導委員の諸先生方、および、下記の方々より現地で有益な御指導をいただいた。

佐藤興治（大分市歴史資料館々長）、玉永光洋（同学芸調査係々長）、武末純一（北九州市立考古博物館）、小倉正五（宇佐市教育委員会）、佐藤浩司（北九州市教育文化事業団）、村上久和、小林昭彦（大分県教育庁文化課）、朝田泰、吉田良介、中野政喜（中津市文化財調査委員）

- 一、調査団の構成は下記の通りである。

調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 教育長 武信 元

調査指導委員 賀川光夫（別府大学教授）

澤村 仁（九州芸術工科大学教授）

小田富士雄（福岡大学教授）

後藤宗俊（大分県教育庁管理部文化課々長補佐）

甲斐忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長）

真野和夫（ “ 調査課長）

調査員 清水宗昭（大分県教育庁管理部文化課埋蔵文化財第一係々長）

栗焼憲児（中津市教育委員会市民文化センター主事）

事務局 石井邦弘（ “ 館長）

竹下 力（ “ 文化・会館係々長）

八木山治（ “ 嘱託）

田中布由彦（ “ 主任）

渡辺明美（ “ 臨時職員）

- 一、本書の執筆、編集は栗焼が行った。また遺物整理については中野温子、岩崎弘子、秋吉三和子、武田まち子（中津市文化財資料室）の協力をうけた。現場作業は以下の方々の協力による。

相原廃寺 井上己徳、田原文子、高橋鈴子、中和代、林静江、宮垣カズエ、日野ツルエ

大下遺跡 徳永賀子、古島正子、杉永文代、神崎文子、黒川洋美、黒川みゆき、大久保国子、湯口一子、湯口ヒロ子、藤原竹子、神尾英子、今永ミヨ子、上原久恵、山内マツ子、藤田千恵子、武本登美子、今川洋子、西口豊子、黒川道子、江熊ノブ子、小山トミエ、神崎容子

- 一、尚、本年度は相原廃寺周辺の航空写真測量（ $S = \frac{1}{300}$ ）も併せて実施した。

目 次

第 1 章	地理と歴史的環境	1
第 2 章	相原廃寺	5
1.	調査の概要	5
2.	遺構	5
3.	遺物	10
第 3 章	大下遺跡	14
1.	調査の概要	14
2.	遺構と遺物	14
第 4 章	まとめ	17
1.	相原廃寺	17
2.	大下遺跡	18

挿 図 目 次

図 1	中津市内遺跡分布図	2
図 2	相原廃寺周辺地形図 ($S = \frac{1}{500}$)	3~4
図 3	相原廃寺 C 地区、第 1 ~ 3 トレンチ平面図及び土層図 ($S = \frac{1}{200}$)	6
図 4	相原廃寺 C 地区、第 2 トレンチ SK 0 5 遺物出土状況及び土層図	7
図 5	相原廃寺 C 地区出土、軒丸瓦実測図 ($S = \frac{1}{3}$)	8
図 6	相原廃寺 C 地区出土、軒平瓦実測図(1) ($S = \frac{1}{3}$)	9
図 7	相原廃寺 C 地区出土、軒平瓦実測図(2) ($S = \frac{1}{3}$)	10
図 8	相原廃寺 C 地区出土、平瓦実測図(1) ($S = \frac{1}{4}$)	11
図 9	相原廃寺 C 地区出土、平瓦実測図(2) ($S = \frac{1}{4}$)	12
図 10	相原廃寺 C 地区出土、平瓦実測図(3) ($S = \frac{1}{4}$)	13
図 11	大下遺跡周辺地形図及びトレンチ位置図 ($S = \frac{1}{2500}$)	15~16

図 版 目 次

図版 1	相原廃寺周辺航空写真	19
図版 2	1) 相原廃寺C地区 調査前(北より) 2) 相原廃寺C地区 第1トレンチ完掘状況(北より)	20 20
図版 3	1) 相原廃寺C地区 第2トレンチSK05遺物出土状況 2) 相原廃寺C地区 第2トレンチSK03・04遺物出土状況(西より)	21 21
図版 4	1) 相原廃寺C地区 第2トレンチSK05軒丸瓦出土状況 2) 相原廃寺C地区 第2トレンチ土層堆積状況(南側土層面)	22 22
図版 5	1) 大下遺跡 A地区遠景(東より) 2) 大下遺跡 B地区遠景(西より)	23 23
図版 6	1) 大下遺跡 B地区トレンチ(南より) 2) 大下遺跡 B地区作業風景	24 24
図版 7	相原廃寺C地区出土 軒丸瓦	25
図版 8	相原廃寺C地区出土 軒丸瓦・軒平瓦	26
図版 9	相原廃寺C地区出土 平瓦(1)	27
図版10	相原廃寺C地区出土 平瓦(2)	28
図版11	相原廃寺C地区出土 平瓦(3)	29
図版12	相原廃寺C地区出土 平瓦(4)・丸瓦	30

表 目 次

表 1	中津市内遺跡地名表	2
-----	-----------	---

第1章 地理と歴史的環境

大分県の北端に位置する中津市は、奥平10万石の城下町として発展し、現在、県北の中核都市として政治、経済、文化の中心となっている。

中津市の地理は広大な沖代平野と、八面山（標高 659m）から延びる舌状台地を中心とした下毛原台地により代表される。市の東部は山国川を境に福岡県と接し、北部に周防灘、西は宇佐市、南に下毛郡三光村と接する。現在の市域は 55.67 km²、人口 66,226 人である。

市内に存在する遺跡のうち、旧石器時代に属するものについては多くを語る資料はない。

縄文時代には棒垣遺跡、植野貝塚、高畠遺跡などがあり、いずれも後期に属する。

弥生時代の遺跡は下毛原台地及び、山国川右岸の自然堤防上に多く存在するが、近年の調査によれば、標高80m前後の高地（平野部との比高差60m以上）にも集落の存在が確認され、新たな展開をみせつつある。

古墳時代に入ると、遺跡の数は増加傾向をみせ、そのうち集落関係としては大坪遺跡、草場遺跡、十前垣遺跡、前田遺跡第2地点、稗多田遺跡、上万田遺跡などがある。特に、近年の調査例をみると、平野部での発見例が目立っている。時期的には4世紀代を中心とした一群と6世紀代の一群に大別され、後者は伊藤田窯跡群を背景とした展開をみせている。墓制にかかるものとしては上の原横穴、岩井崎横穴、城山古墳群、城山横穴、幣旗邸古墳などがある。このうち、上の原横穴については、保存状態が良好な事と相俟って、葬送儀礼、家長制など当時の社会状況の復元が積極的に論じられている。尚、市内に存在した唯一の前方後円墳であった亀山古墳は昭和30年頃、国道10号線建設に伴い未調査のまま破壊されている。次に、生産に関するものとして伊藤田窯跡群がある。現在までに都合10基程が調査されており、6世紀後半から8世紀代に至る須恵器、瓦などの生産が認められている。特に踊ヶ迫窯での所謂須恵質瓦の生産や、相原廃寺への供給関係が確認されたホヤ池窯の調査結果は注目される。

白鳳期から奈良時代にかけて注目されるのは相原廃寺と、沖代条里遺構である。相原廃寺については後述するが、沖代条里については少なくとも8世紀前半には成立したと考えられている。その遺存状況は良好とされるが、近年急速に宅地化が進行しつつあり、これに対応して確認調査等を行っているが十分な成果は上がっていない。また、相原廃寺との関連も考えねばならず、今後の調査に期待したい。

この他、近年の調査では平安時代から室町時代にかけての例が増加しつつある。前田遺跡、前田遺跡第2地点、安平遺跡、安平北遺跡、鍋島遺跡C地点などで、瓦器、輸入陶磁器などをはじめ、木製品などの良好な資料が得られている。



図1 中津市内遺跡分布図

No	遺跡名	種別	所在地	No	遺跡名	種別	所在地	No	遺跡名	種別	所在地
1	鍋島古墳	古墳	今津	31	黒水遺跡	散布地	加来	61	福島地下式横穴	横穴	福島
2	鍋島遺跡	散布地	今津	32	上ノ原遺跡	包含地	上ノ原	62	北原第3遺跡	散布地	北原
3	若旗古墳	古墳	今津	33	幣旗郎古墳	古墳	上ノ原	63	大悟法遺跡	散布地	大悟法
4	植野貝塚	貝塚	植野	34	相原古墳1・2号	古墳	上ノ原	64	中原遺跡	散布地	中原
5	植野伽藍遺跡	散布地	植野	35	坂手隈横穴群	横穴	上ノ原	65	上池永遺跡	散布地	池永
6	植野古城遺跡	散布地	植野	36	坂手前横穴	横穴	上ノ原	66	西永添遺跡	散布地	永添
7	野依古墳	古墳	野依	37	台遺跡	散布地	上ノ原	67	勘助野地遺跡	填墓	上ノ原
8	松尾遺跡	散布地	野依	38	永添中園遺跡	包含地	永添	68	上ノ原横穴群	横穴	上ノ原
9	是則塚	古墳?	野依	39	梶屋遺跡	散布地	永添	69	沖代小学校遺跡	水田跡	沖代町
10	黒川古墳	古墳	伊藤田	40	下池永遺跡	散布地	池永	70	合馬遺跡	散布地	合馬
11	大池窯跡	窯跡	野依	41	全德遺跡	散布地	合馬	71	ガラヌノ遺跡	古墳・墓跡	合馬
12	瓦ヶ追窯跡	窯跡	野依	42	相原廃寺	寺院	相原	72	舞手橋東段上遺跡	住居趾	田尻
13	野依迫ノ谷遺跡	散布地	野依	43	三口遺跡	包含地	上ノ原	73	是能遺跡	散布地	定留
14	踊ヶ追窯跡群	窯跡	野依	44	上万田遺跡	包含地	万田	74	和間貝塚	貝塚	定留
15	穂谷窯跡群	窯跡	野依	45	高瀬遺跡	包含地	高瀬	75	諸田遺跡	散布地	今津
16	野依烽火台	烽火台	野依	46	高畑遺跡	包含地	高畑	76	中津城跡	城跡	二ノ丁
17	ゴンゲ遺跡	散布地	野依	47	豊田小学校遺跡	包含地	豊田町	77	停車場遺跡	散布地	今津
18	大谷窯跡群	窯跡	野依	48	龜山古墳	古墳	合馬	78	植野遺跡	散布地	植野
19	城山横穴群	横穴	伊藤田	49	沖代条里遺構	条里	沖代町	79	六畠町遺跡	遺跡	永添
20	城山古墳群	古墳	伊藤田	50	野依条里遺構	条里	野依	80	大池南遺跡	遺跡	永添
21	岩井崎横穴群	横穴	伊藤田	51	大悟法条里遺構	条里	大悟法	81	清水郎原遺跡	遺跡	加来
22	城土遺跡	散布地	伊藤田	52	大池窯跡	窯跡	野依	82	大坪遺跡	集落	加来
23	福島遺跡	包含地	福島	53	草場遺跡	散布地	伊藤田	83	梗多田遺跡	集落	加来
24	三保遺跡	包含地	福島	54	草場窯跡	窯跡	伊藤田	84	犬丸川Loc3	集落	加来
25	田丸遺跡	城跡	福島	55	城山窯跡群	窯跡	伊藤田	85	寺追横穴群	横穴	伊藤田
26	長久寺貝塚	貝塚	福島	56	大谷窯跡群	窯跡	伊藤田	86	安平・安平北遺跡	集落	伊藤田
27	北原遺跡	散布地	北原	57	才木遺跡	散布地	伊藤田	87	前田遺跡	集落	伊藤田
28	北原第2遺跡	散布地	北原	58	洞ノ上窯跡	窯跡	伊藤田	88	夜鳴池西窯跡遺跡	窯跡	伊藤田
29	土木貝塚	貝塚	北原	59	入垣貝塚	貝塚	福島	89	十前垣遺跡	集落	赤迫
30	定留貝塚	貝塚	定留	60	棒垣遺跡	包含地	福島	90	大下遺跡	集落	今津

表1 中津市内遺跡地名表



図2 相原廃寺周辺地形図 ($S = \frac{1}{500}$)

第2章 相原廃寺

1. 調査の概要（図2、図版1）

調査は前年度の成果をふまえ、A地区とB地区の間に位置する水田部分をC地区として設定して行った。この水田部分は従来講堂の推定位置であり、当然これらに付随する施設の存在が予想された。しかし、地元ではこの水田部分はA地区とした神社地の造成に際し、かなりの規模で下げが行われたと言われており、事実、昨年度のA地区の調査では神社地周辺部分で、多量の古瓦片を含む造成土が確認されている。また、現在神社地境内と、石垣部分にはこの時掘り出されたと言われる礎石10個が二次利用の形で残されている。

したがって、調査はこのC地区に果して遺構が遺存するか否かを確認することを第一義と考え、仮りに遺構が確認された場合にはその性格を明確にするために、トレンチの拡張、遺構の掘り下げ等を行うこととした。

調査に先立ち、トレンチの設定を行い、A、B地区を結ぶ第1トレンチとこれに直行して東西方向に第2トレンチの設定を行った。さらに、C地区南端に第2トレンチと併行して第3トレンチを設定し、各々講堂及び塔の推定位置をカバー出きるよう配慮した。

調査の結果、各トレンチでは遺構の残存が認められ、遺物の出土も相当量認められた。特に、第2トレンチでは遺存状況が良好であり、部分的にトレンチを拡張して調査を行った。

2. 遺構（図3、4、図版2～4）

第1トレンチ

北半に集中して溝状遺構が検出された（SD04～SD14）またトレンチ中央部ではSK01とした井戸状の遺構も検出されている。全体として上部を後世の開発により削平されており、SD05、06、09についてはトレンチ東側でわずかに認められずすぎず、ほとんど溝として認定しえない状況であった。そうした中で北較的安定した遺存状況を示すのはSD04、07、08、12、14である。SD04は最大巾110cm程、深さ20cm程、SD07は巾90cm、深さ15cm程、SD08は最大巾90cm、深さ20cm程、SD12は巾70cm、深さ20cm程、SD14は巾20cm、深さ25cm程の規模を有する。いずれもほぼ東西方向に延びる状況が認められるが、SD08などは溝状遺構とするにはやや疑問もある。いずれにせよ、2m巾のトレンチに直交する状況で認められていることからすれば、単に溝状遺構とするには注意を要するかもしれない。SK01は直径1.5m程の井戸状の遺構であるが、諸般の事情で完掘は出来ていない。

第2トレンチ

中央部から西側にかけて遺構が確認されている。特に中央部のSK02～05、SD16、17では遺物の出土が著しく、一部拡張してその確認に努めた。SK02～05はいずれも橢円形を呈するが、SK05以外は全体を知りえない。SK05は最大巾1m、深さ0.3m程の溝状の土壠であり、多量の遺物を包含する。I層は黒色の粘質層で、トレンチ全体で言うIII層に対比される。II層は茶褐色の粘質土であり、上部に拳大のレキを多量に含む。遺物はこのII層中に包含されており、II層が一括の埋土であることから、遺物は一時期に投棄されたものと考えられる。III層は黒色の粘質土である。SD16

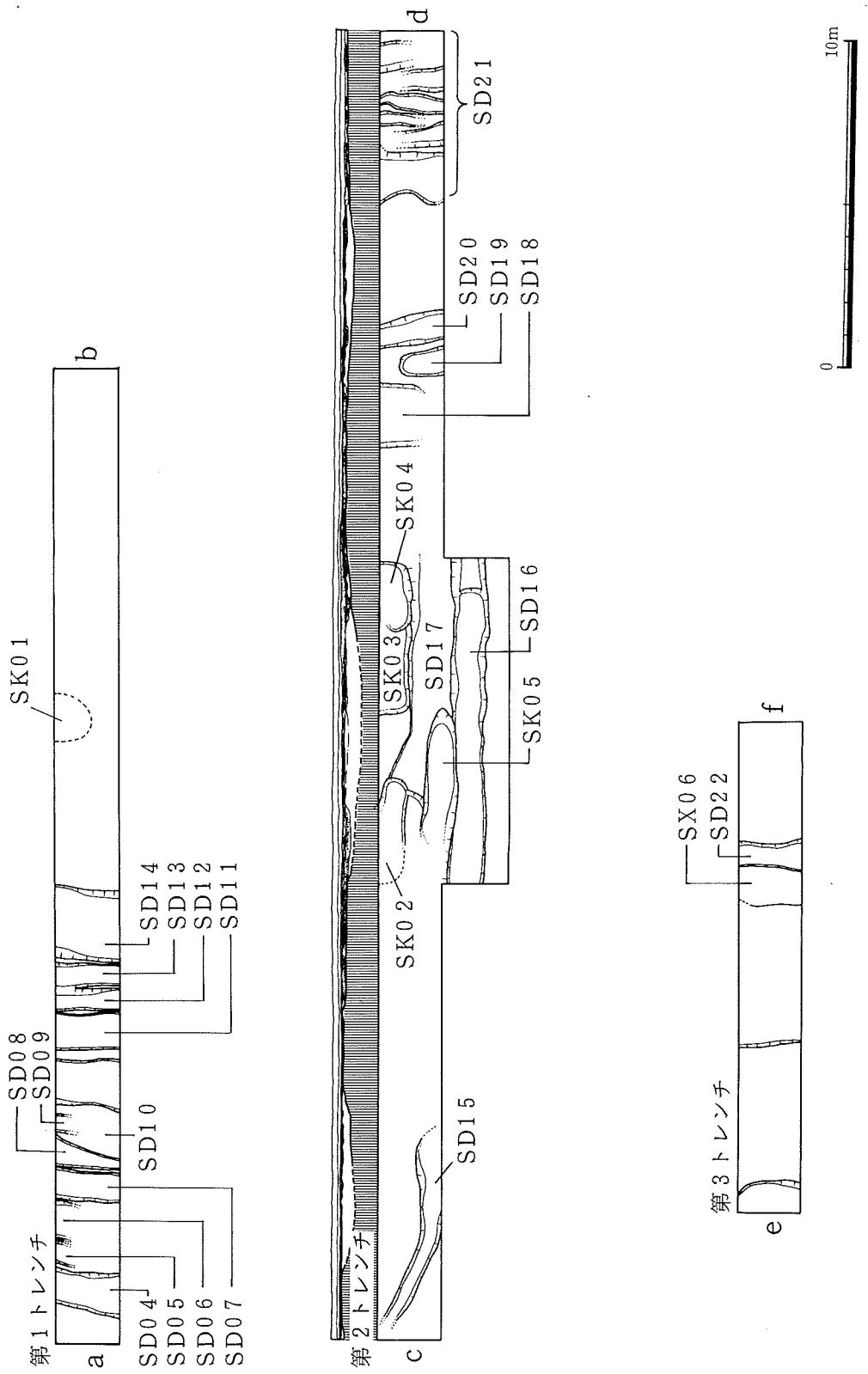


図3 相原廢寺C地区第1～3トレンチ平面図及び土層図 ($S = \frac{1}{200}$)

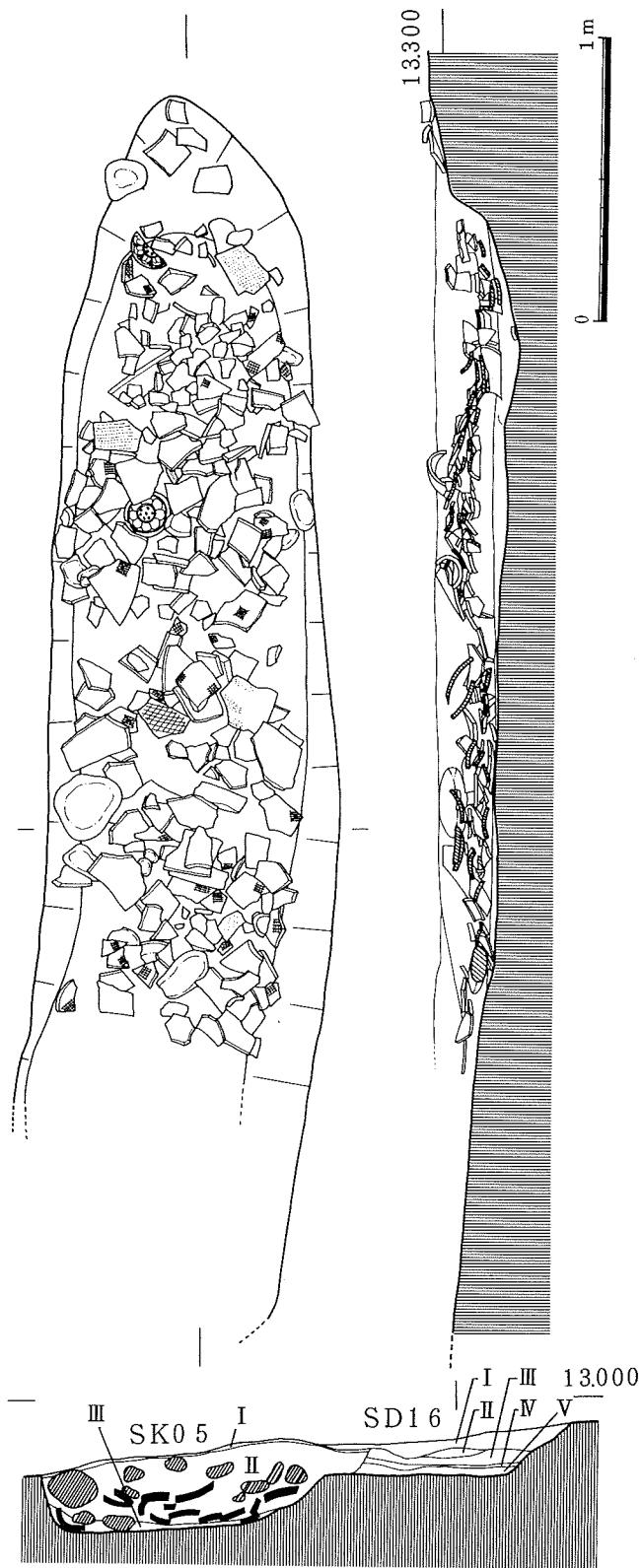


図4 相原廃寺C地区第2トレンチSK05遺物出土状況及び土層図

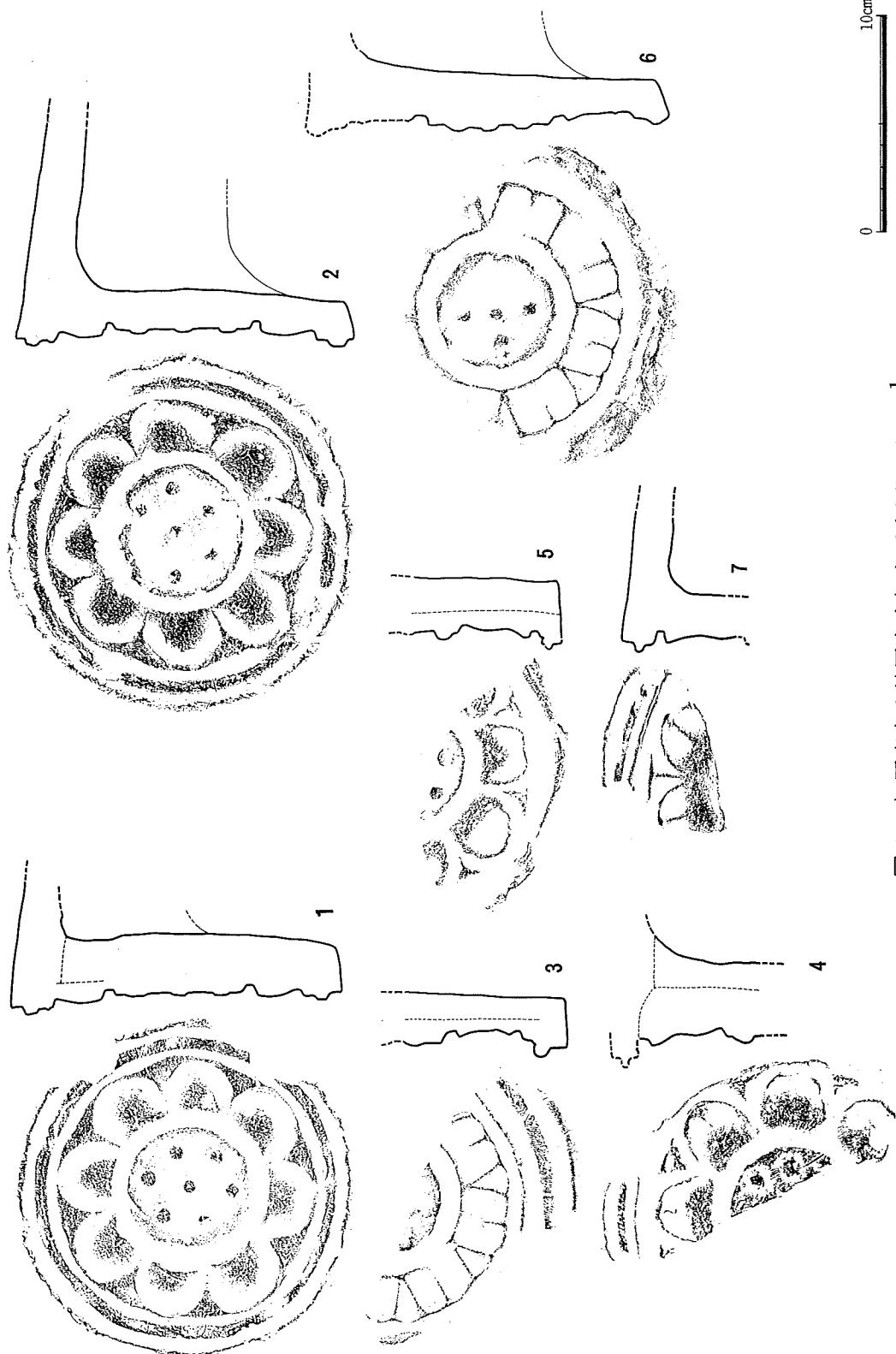
との関係は土層図でみる限り、SD16 を SK05が切っているSD16は巾1.1m程で、ほぼ東西に延びる。C地区で検出された溝状遺構の中では最も安定しており、遺物も多く含む。トレンチ西側では溝状遺構がまとまって検出されているが、第1トレンチと同様、遺存状態は良くない。その中で注目されるのがSD21とした遺とした遺構群である。今回の調査範囲では明確にしえなかったが、第3トレンチ SD22、SX06との関連が明確になれば、寺域を確定する上で有効な資料となるかもしれない。

第3トレンチ

西端でSD22、SX06が確認されたにすぎない。遺物も少なく、東半分は旧地形が著しく削平されている。SD22は巾70cm程で遺存状態は良くない。SX06は地山層に2～3cm程粘土を貼った様な遺構であり、性格は明確にしえないが、興味深い遺構である。

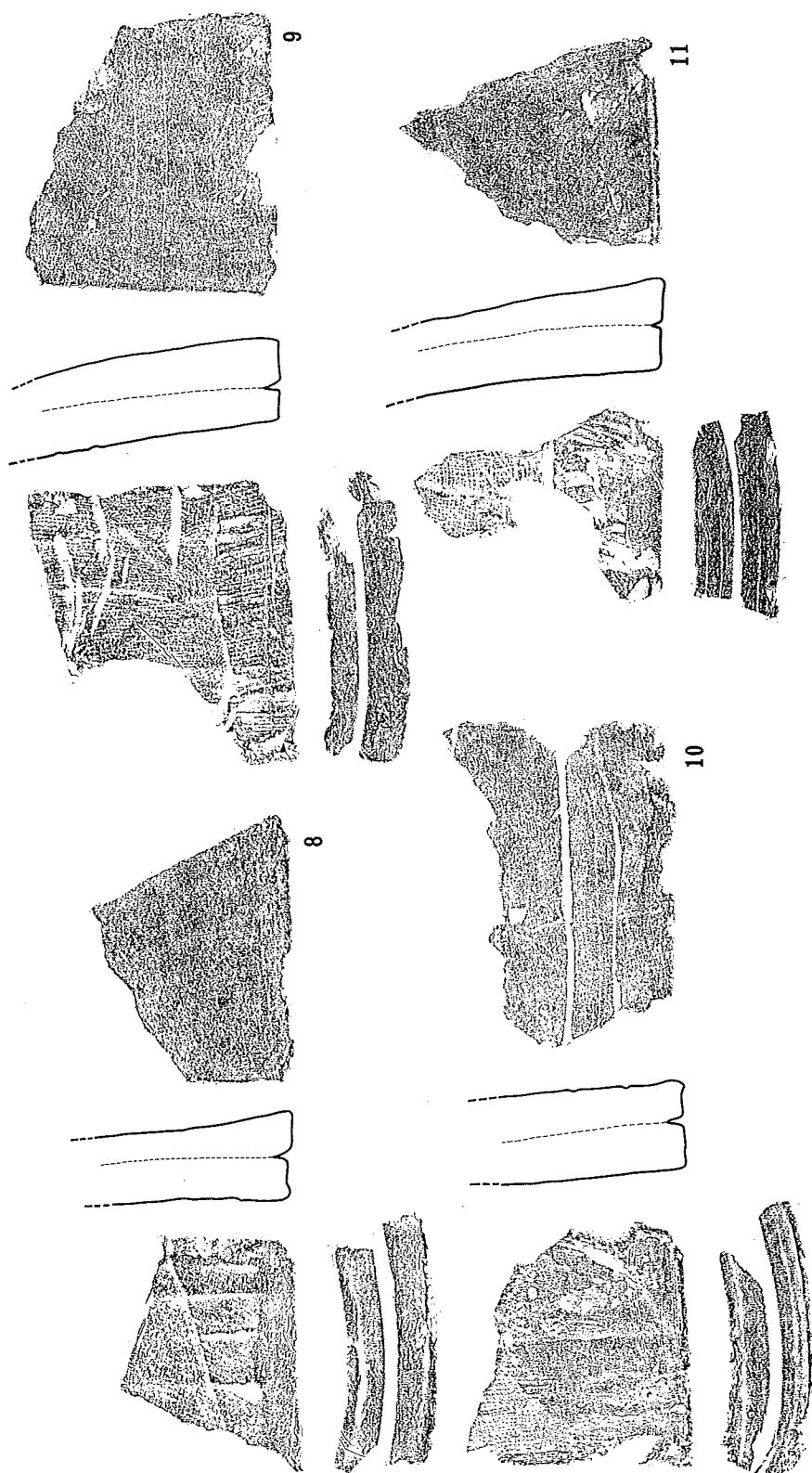
0 10cm

図 5 相原廢寺 C 地区出土軒丸瓦実測図 ($S = \frac{1}{3}$)



10cm
0

図 6 相原廢寺 C 地区出土軒平瓦実測図(1) ($S = \frac{1}{3}$)



3. 遺物 (図5~10 図版7~12)

遺物はほとんどが古瓦である。他に須恵器片、土師器片、中世の遺物などが認められている。古瓦は平瓦がほとんどで、軒丸瓦は7点、軒平瓦は8点出土した。軒丸瓦の計測値は以下の通り。

No.	型式	直径	内 区						外 区			接合法	瓦当厚		
			中 房		蓮子数	蓮子径		弁区径	弁数	幅	高	形 態			
			径	高		中央	周囲								
1	C	154	61	5	1 + 6	7	8	(116)	8	20	7	直立	B	20	
2	C	154	62	5	1 + 6	8	8	(122)	8	18	7	直立	A	18	
3	B	(178)	56	7	(1 + 6)	—	9	(121)	8	22	12	切込	B	23	
4	A	(160)	52	7	(1 + 6)	—	9	(121)	8	13	14	切込	B	49	
5	A	(160)	50	7	(1 + 6)	—	9	(119)	8	11	(9)	切込	B	32	
6	B	(170)	57	8	1 + 4	8	8	(136)	8	17	6	直立	A	17	
7	A	—	—	—	—	—	—	—	(8)	16	11	直立	—	24	

: 単位 mm : () は推定値

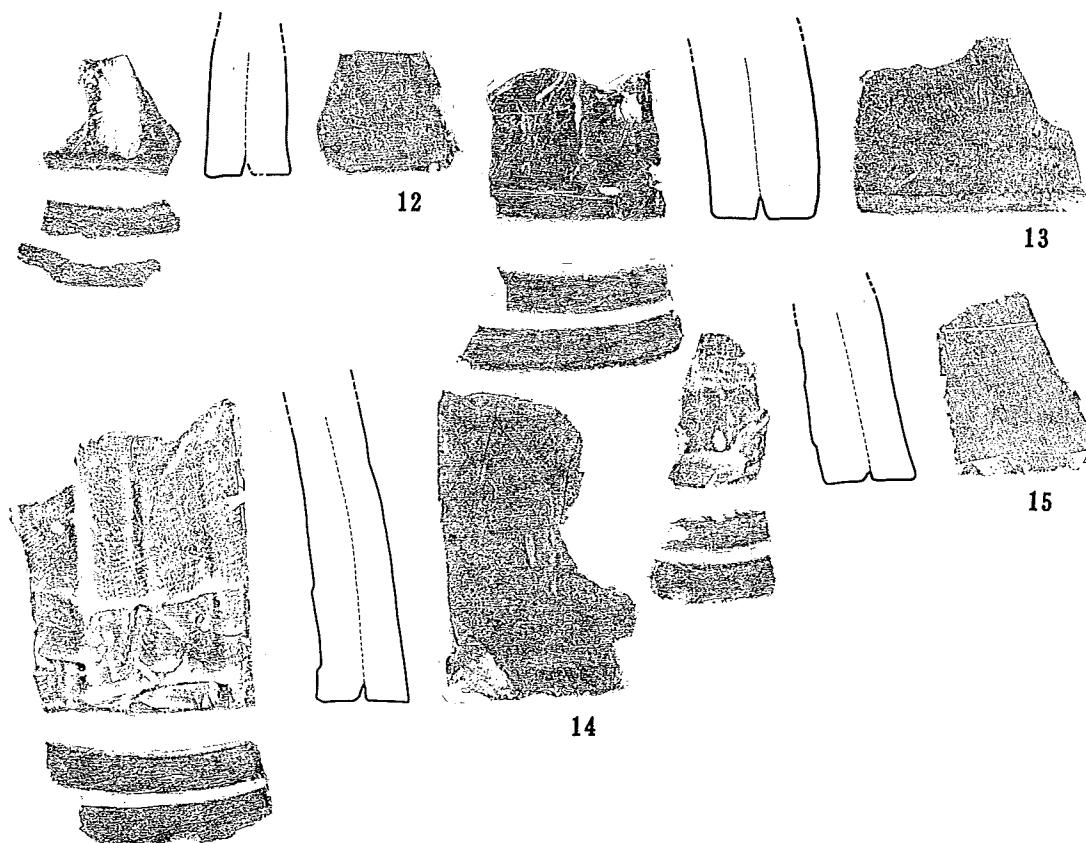
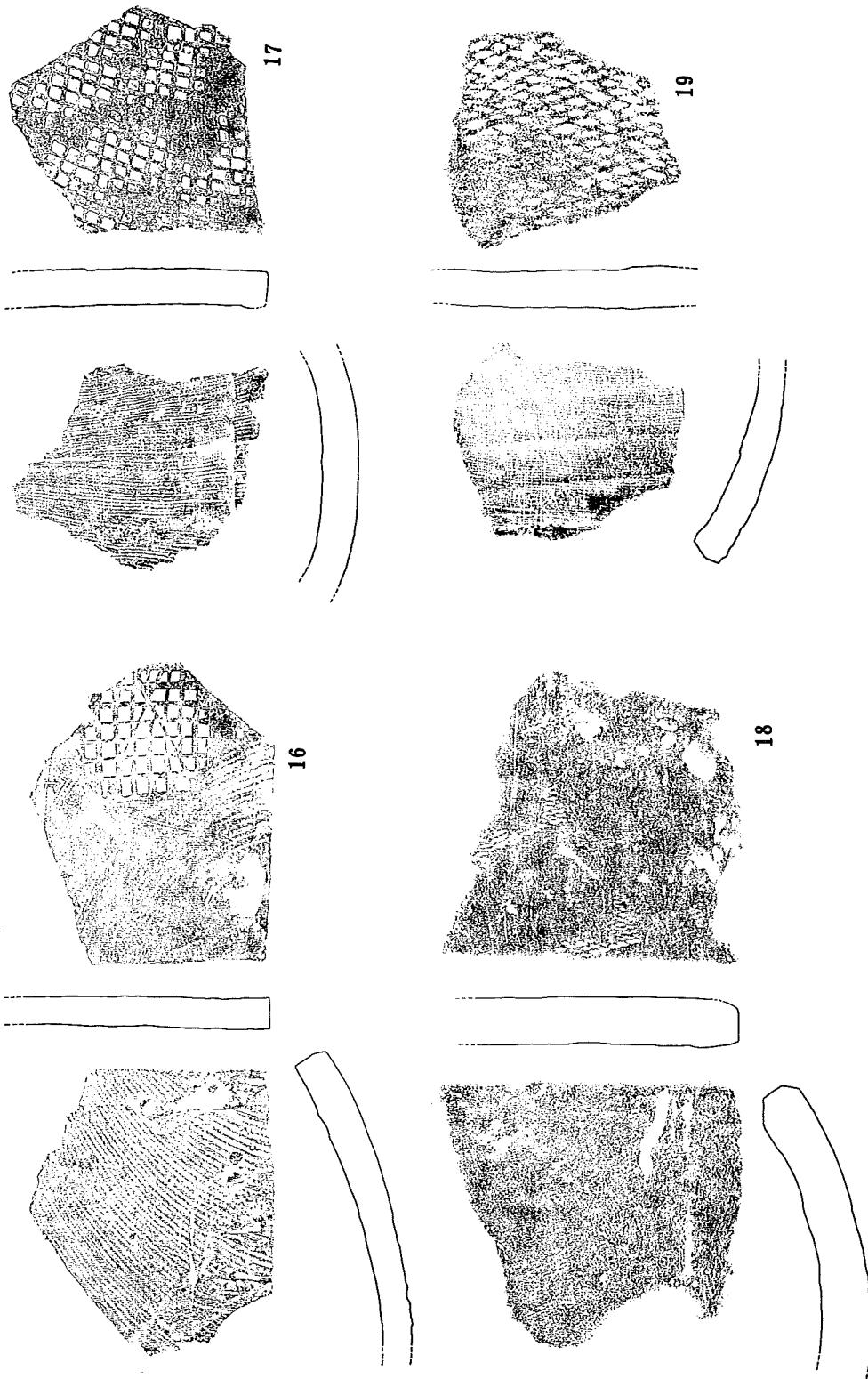


図7 相原廃寺C地区出土軒平瓦実測図(2) ($S = \frac{1}{3}$)



0 10cm

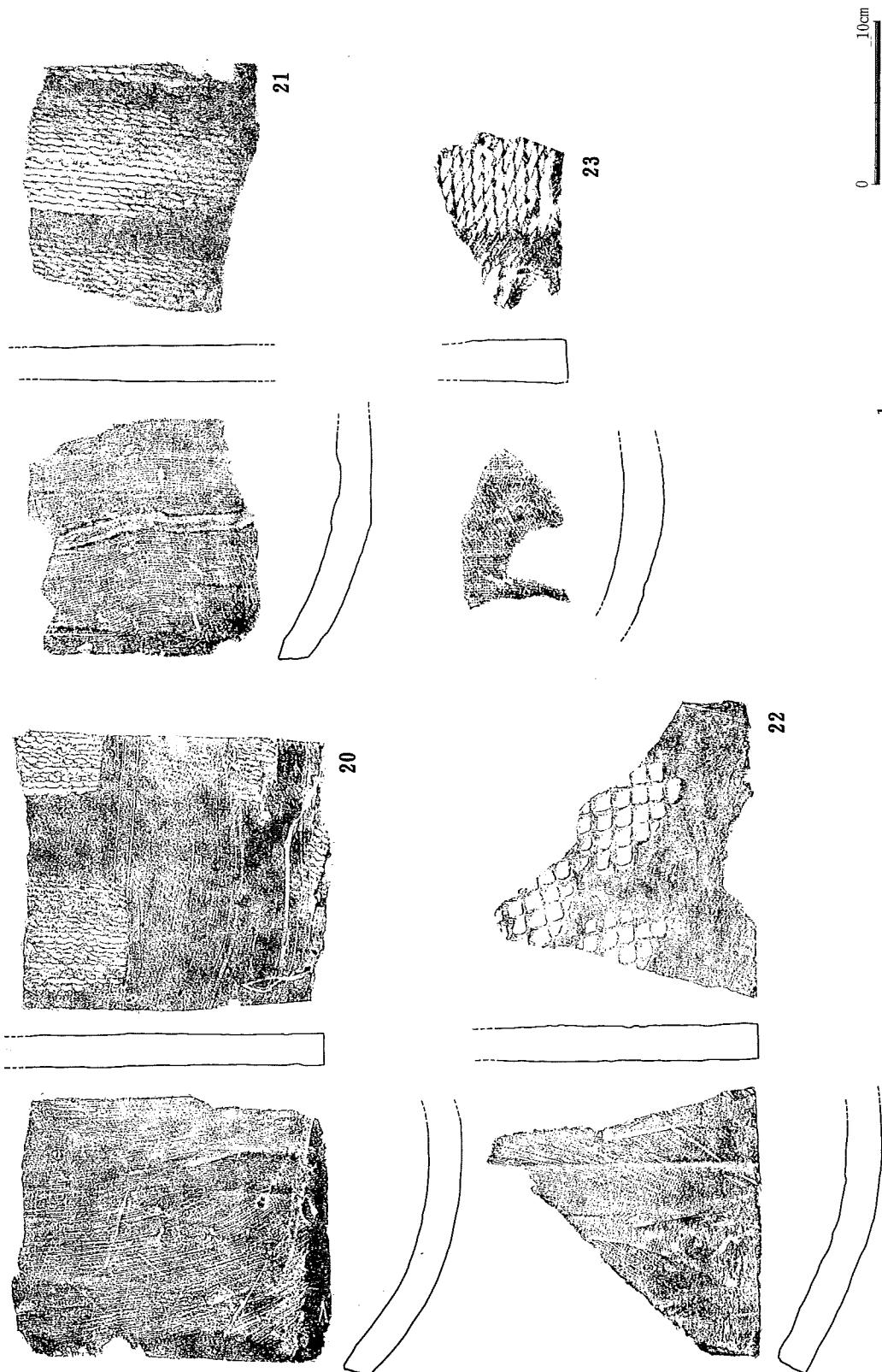
図 8 相原廃寺 C 地区出土平瓦実測図(1) ($S = \frac{1}{4}$)

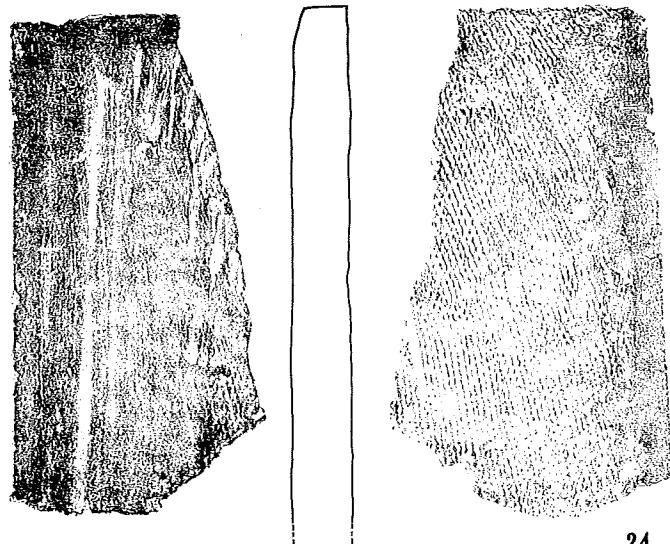


相原発寺 C 地区出土平瓦実測図(2) ($S = \frac{1}{4}$)

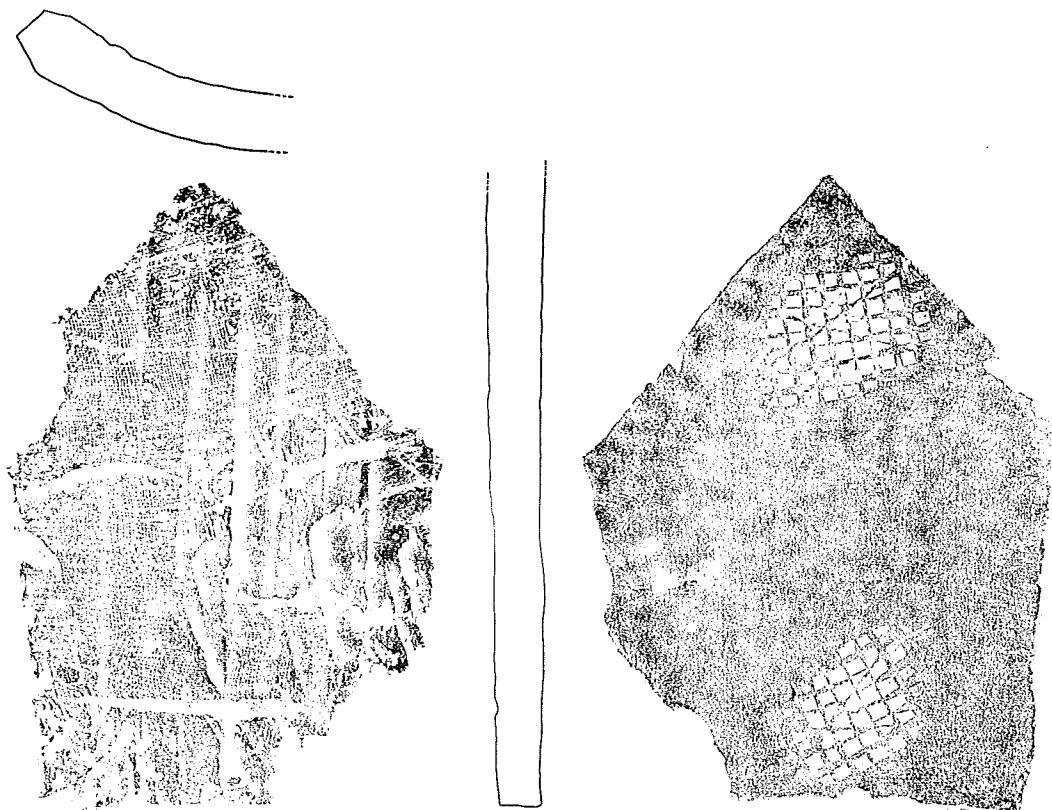
図 9

0 10cm





24



25

0 10cm

図10 相原廃寺C地区出土平瓦実測図(3) ($S = \frac{1}{4}$)

第3章 大下遺跡

1. 調査の概要（図11、図版5）

中津市教育委員会では、市立今津中学校の校舎の老朽化に伴い、現地建替及び他地への移転を含めた事業計画を昭和62年より検討してきた。その結果、平成元年度に至りようやく現在地の東側隣接地への全面移転が決定し、事業費の予算化を図るとともに、予定地の用地買収交渉に入った。その間、予想される種々の問題について関係各方面との協議、調整を行ってきたが、埋蔵文化財の取り扱いについても担当課である市民文化センターに照会がなされた。

これをうけて、予定地内の分布調査を実施したところ、予定地東側（B地区）において須恵器片の散布がみられたことや、西側に良好な微高地が存在することから、確認調査の必要があるとの判断を行った。この結果、用地の買収が終了した段階で確認調査を実施することとし、場合によっては校舎の建設位置決定等について協議することとした。

ところで、周辺地域は以前より遺跡の集中地帯として周知されており、主なものだけでも植野貝塚（県指定）、若籠古墳などが存在する。また古くは昭和40年に鍋島孤塚古墳が発見されており、白木原和美氏により報告がなされている（九州考古学No32 1967 所収）。さらに、昨年今津中学校内にある市立今津幼稚園内で立木の処理が行われた際にも石蓋土拡のものと思われる石蓋を確認している。こうした遺跡は標高10～12m程の洪積台地上に存在しており、今後とも注意が必要な地域である。

こうした経緯をふまえ、調査は移転予定地内西側の微高地をA地区・東側をB地区とし、各々巾1m×長30m程のトレンチを設定して行った。

A地区では第1～5トレンチを設定したが、微高地周辺ではかなりの二次的な造成土が認められ本来の地形はかなり傾斜していることが確認された。これに対し、中央部付近では表土層も薄く、全体としてなだらかなカーブを描く微高地で、中央部付近は削平を受けている可能性を示唆した。

B地区では作付等の都合から、やや変則的なトレンチの配置となったが、A地区と同様のトレンチ（第6～14トレンチ）を設定した。

2. 遺構と遺物（図版6）

A地区では各トレンチの中央部付近を中心に、pit、溝状遺構、土拡などが確認され、第5トレンチでは黒耀石製の石鎌1点、須恵器片数片が出土している。

B地区では第7～9、13、14トレンチについてはpit等が若干検出されたにすぎず、遺物の出土も全く認められなかった。これに対し、第6、10、11トレンチで都合4軒の竪穴式住居が確認された。さらにこれらのトレンチを中心にPit群が確認され、第12トレンチでは掘立柱建物1棟が認められた。これらの遺構に伴い遺物も須恵器、土師器を中心に出土しており、須恵器では横瓶、壺など、土師器では短頸壺、椀などが認められている。



図11 大下遺跡周辺地形図及びトレンチ位置図 ($S = \frac{1}{2500}$)

第4章 まとめ

1. 相原廃寺

土層（図版4-2）

基準的な層序は以下の通りである。

I層 水田耕作土層。

II層 水田床土層。

III層 茶褐色土。漆黒色小ブロック、褐色小ブロックを含むかなりしまった土層で、粘質である。

第2トレンチ中央部ではやや厚く、20cm程の堆積する。全体としてC地区に広く堆積すると考えられるが、地点によっては様相が若干異なる。土層内には古瓦片の他に磁器や染付等も若干含むことから、地元の人が言う水田の地下げ時の整地層かも知れない。いずれにせよ、もともと、遺構のフク土であった可能性が高い。

IV層 暗茶褐色土。III層に対してやや暗い。遺物は古瓦や須恵器などの他、新しいものは全く含まず、遺構のフク土である。溝状遺構や土拡内、また第2トレンチ中央部に薄い層状に認められ、かなりしまった粘質土である。

V層 淡褐色土。地山土と考えられるもので、砂質が強くサラサラしている。各地点で土質に若干の変化があり、細かな分層が可能であるが、地山層（VI層）との関係をみると、山国川の洪水等の作用による水堆性の二次堆積の可能性が強いと思われる。遺物は含まない。

VI層 褐色土。礫を多く含む地山層である。サラサラした砂質土で、第1トレンチ南側では認められない。第2トレンチでは起伏が激しく、凹状に落ちた部分にV層が厚く堆積する。

この他、地点によっては細かに分層可能であるが、一応ここではスペースの都合で基準的な層序の説明にとどめたい。結果的にはIII層とIV層が問題となり、V層についてはプライマリーな状況が認められることから、これが当時の相原廃寺との関連を有する唯一のものと考えられる。

遺構

今回検出された遺構は前述の如く、溝状遺構（SD4～22）及び土拡（SK01～05）が主体で、第3トレンチで性格が明確でないもの（SX06）もある。全体としては遺存状態が悪く、疑問の残るものもある。しかし、C地区内に確実に当時の遺構が遺存することが確認できたことは、今後の調査を行う上で大きな成果であった。

その中で特に注目されるのが第2トレンチSD16、SD21、第3トレンチSD22、SX06である。これらはC地区全体からみた場合、寺域を決定する上で大きな意味をもつものと考えられる。つまり、SD21とSD22は相互の関連性が強く、SX06が南北へ延びるとすれば、寺域の西限を示すものかもしれない。また、SD16については極めて安定した状態で東西に延びる状況を示しており、位置的にも寺域の北限、ないし、講堂址北端を示すのかもしれない。しかし、第1トレンチでは、東西に延びると思われる溝状遺構が集中して検出されるなど、理解に苦しむ状況も認められる。いずれにせよ、今回の調査範囲では結論を出すまでには至っておらず、来年度以後、こうした状況をふまえて更に慎重な調査を行う必要がある。

尚、出土遺物等により、SD11、12、14及びSK01については中世以降の所産であることが明確となっている。特にSK01は膨大な量の古瓦を出土したが、五輪塔の水輪等が共伴しており、遺構の形状などから近世の井戸跡ではないかと考えられた。恐らく井戸を廃棄した際に付近に散乱した古瓦を利用して埋めたものであろうが、時間の都合上完掘には至っていない。

遺 物

遺物は前述の如く、古瓦がほとんどで、須恵器片、土師器片が若干出土している。

古瓦は昨年度と同様に単弁八弁蓮華文軒丸瓦、重孤文軒平瓦及び平瓦、丸瓦等でその他については細かな検討を行っていない、軒丸、軒平瓦については昨年度と同様であり、特に変化は認められない。平瓦は凸面の叩きによりA・B類とし、これを細分していたが、今回新たに追加を行っている。A類については従来通りであるがB類について、従来は縄目の原体が1種類であったものが、「目の細かい縄を用いるもの」(a類)と「目の粗い縄を用いるもの」(b類)が存在することが明らかとなつたため、中分類を設け区別した。

尚、今回の調査で特徴的なことは、平瓦でB類が極端に少ないとある。従来その比率に大きな差はなかったが、今回はA類、特にA-2類としたものが特に目立つており、SK05などでは主体を占めた。こうした在り方は平瓦の変遷を考える上で重要であり、今後の資料整理を行う上での課題となる。以上、概略を述べた。

注 古瓦の分類については、中津市教育委員会(1989)「相原廃寺」を参照されたい。

2. 大下遺跡

調査の結果、A地区では、pit、溝状遺構を中心とした遺跡の存在が予想され、石鎌や須恵器片などの出土と併せ、本調査の必要があると判断した。

B地区では調査区中央部を中心に竪穴式住居跡が存在することから、この部分を中心に集落が展開することが予想された。但し、調査区の北側、南側についても注意する必要がある。また、集落の時期については、出土した須恵器等からみて6世紀末～7世紀初が考えられよう。



相原廃寺周辺航空写真



2) 相原廃寺 C 地区第 1 トレンチ完掘状況（北より）



1) 相原廃寺 C 地区調査前（北より）



1) 相原廃寺 C 地区第 2 トレンチ SK0 5 遺物出土状況

2) 相原廃寺 C 地区第 2 トレンチ SK0 3・0 4 遺物出土状況
(西より)





1) 相原廃寺C地区第2トレンチSK05軒丸瓦出土状況



2) 相原廃寺C地区第2トレンチ土層堆積状況（南側土層面）



1) 大下遺跡A地区遠景（東より）



2) 大下遺跡B地区遠景（西より）

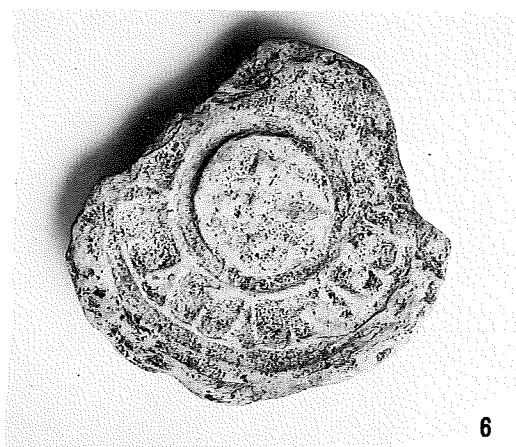
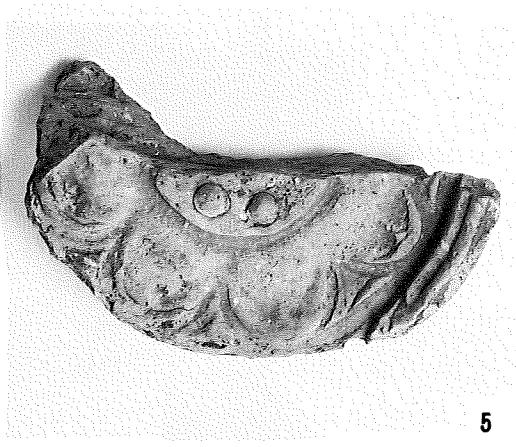
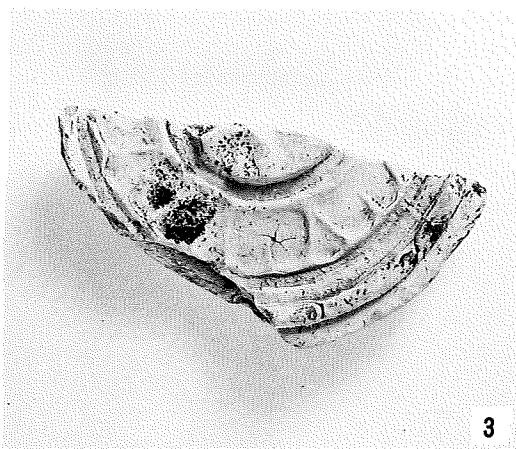
図版 6



1) 大下遺跡B地区トレンチ（南より）

2) 大下遺跡B地区作業風景

図版 7



1.2 C類

相原廃寺C地区出土軒丸瓦

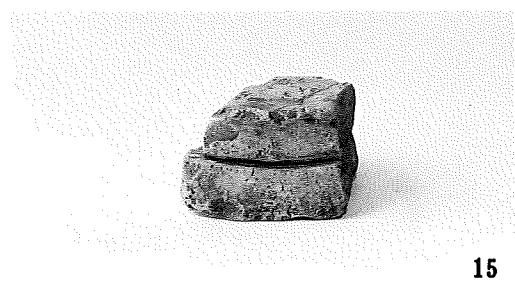
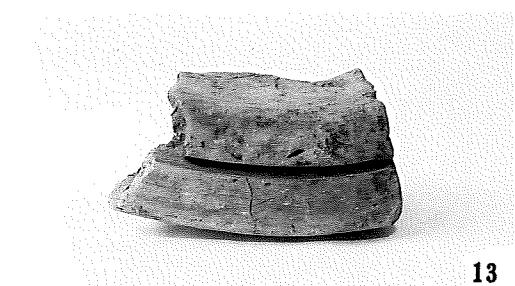
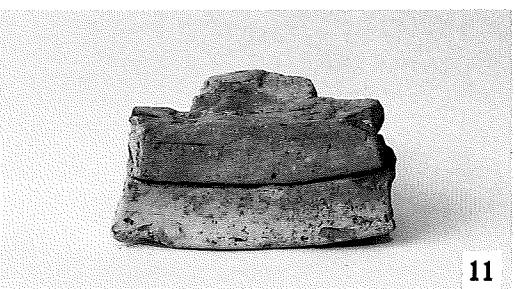
4.5 A類

3.6 B類

図版 8

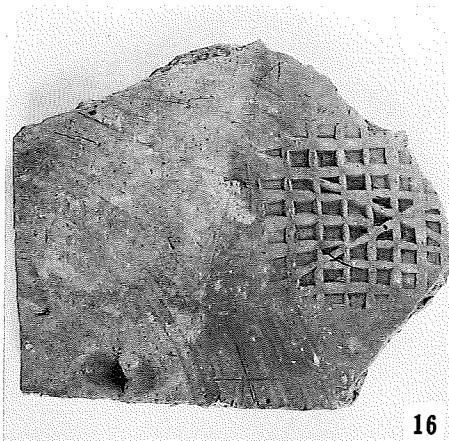


A類



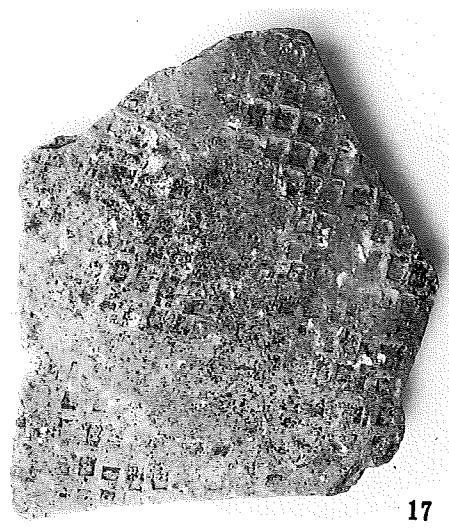
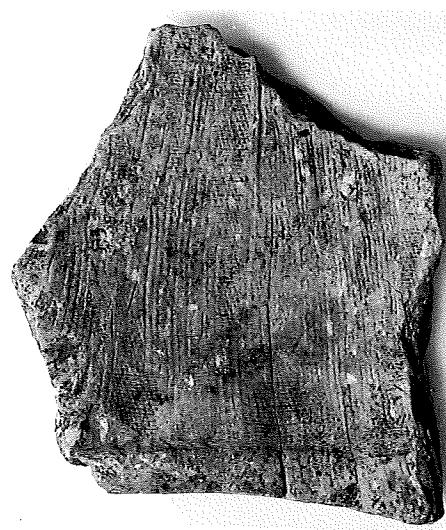
相原廃寺C地区 出土軒丸瓦、軒平瓦

図版 9



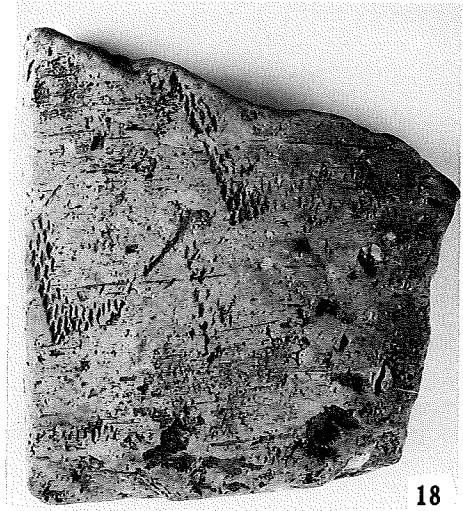
16

A-2類



17

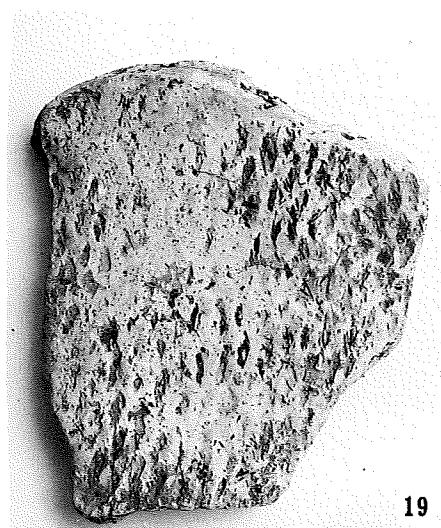
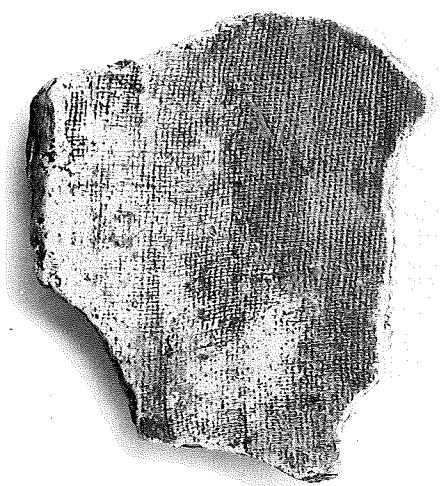
A-1類



18

B-a-3類

相原廐寺C地区出土平瓦(1)



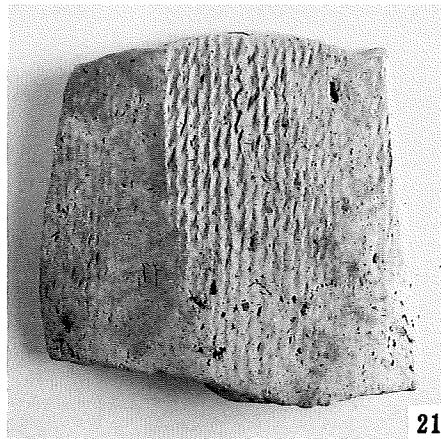
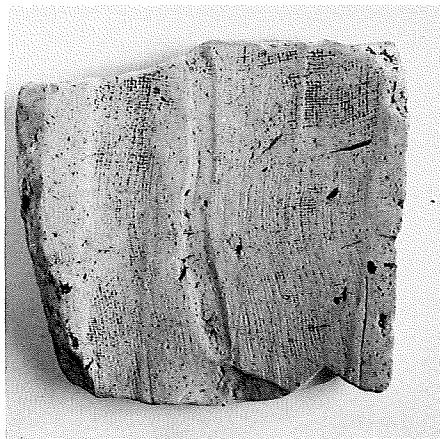
19

B-b-1類



20

B-a-2類

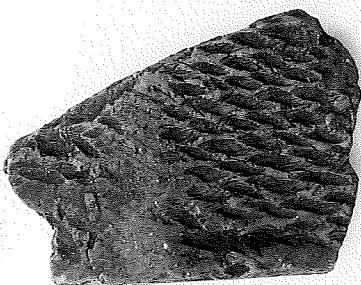


21

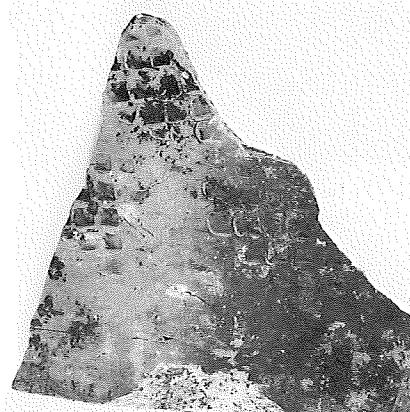
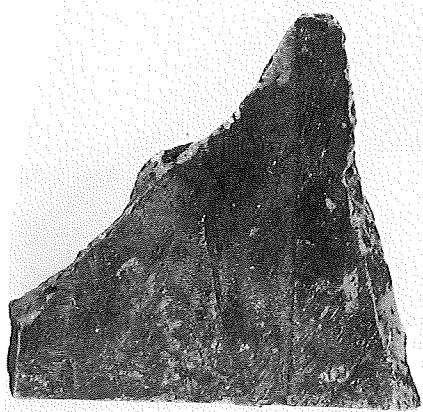
B-a-2類

相原廃寺C地区出土平瓦(2)

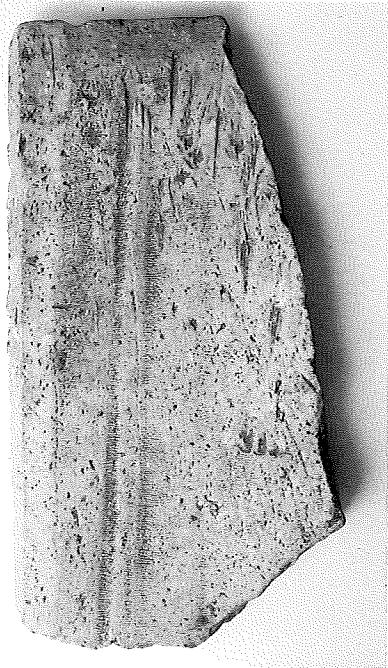
図版11



22 B - b - 2類



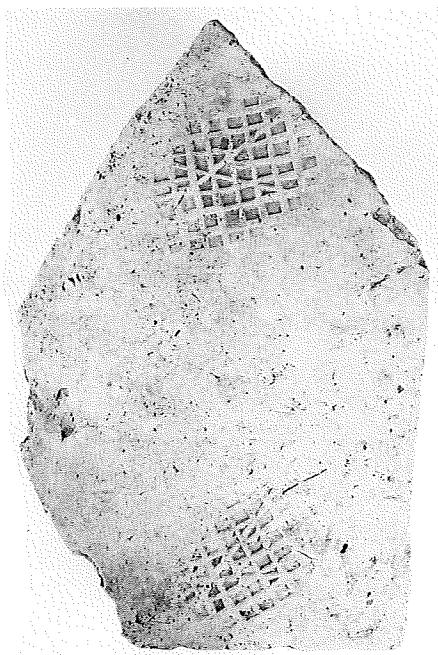
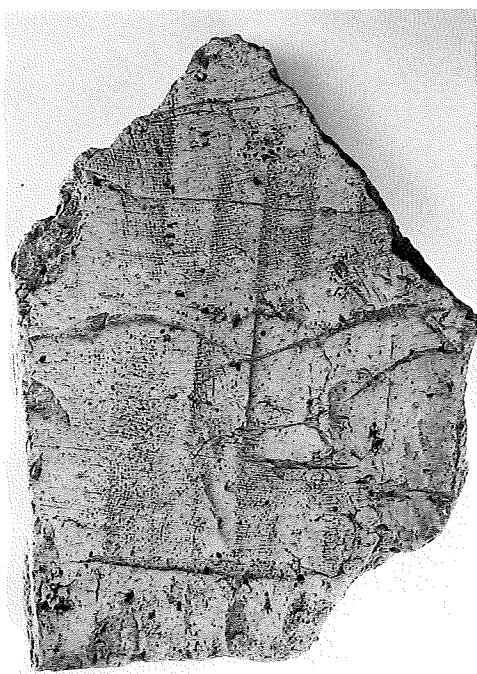
23 A - 1類



24 B - a - 1類

相原廃寺C地区出土平瓦(3)

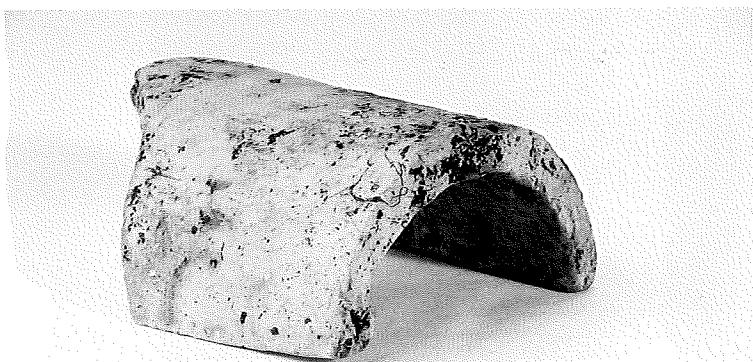
図版12



25 A-2類



26



27 26・27丸瓦

相原廃寺C地区平瓦(4)・丸瓦

相原廃寺 II

大下遺跡

中津市文化財調査報告 第8集

平成2年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 川原田印刷社